

芸術作品を隠すことは悲しいことです。

大村秀章愛知県知事と津田大介芸術監督は、「表現の不自由展・その後」の展示中止という選択をしました。

テロの脅迫犯が捕まりました。
いま再び障壁をなくさなければなりません。

8月1日から8月3日まで「表現の不自由展・その後」を見た日本の人々の姿は、落ち着いていて、繊細でした。

しかし、展示前から作品に影響を与えようとする大村秀章愛知県知事と津田大介芸術監督の意図的な干渉（写真撮影とSNS不許可）は失望そのものでした。津田さんは誰よりも真っ先に表現の自由の先頭に立たなければなりませんでした。大村愛知県知事もトリエンナーレ実行委員長として、表現の自由に対する名誉を守らなければならない立場にありましたが、むしろ表現の不自由の国家であることを、津田さんとともに国際的に認めさせた張本人になりました。

あいちトリエンナーレは10月14日まで成功裡に成し遂げられなければなりません。間違った選択は元に戻さなければなりません。

日本社会が抱えている不都合な真実かもしれませんが、それを芸術作品として昇華させたのが「表現の不自由展・その後」です。日本の市民が直面しなければならない作品であり、本当に語らなければならない作品です。

テロの脅迫に屈服する姿に、正義と真実さえ蔽い隠そうしているのではないかと、う疑いをもちます。

河村たかし名古屋市長と菅義偉官房長官の発言は、日本の憲法にも厳然と存在している、表現の自由を侵害する反憲法的詭弁です。また、彼らは展示に責任を持つ関係者でもありません。自分が気に入らないからと展示に対して圧力を行使するのは、日本のすべての文化芸術を見下す不道德な行為です。

日本は西欧に文化的に多くの影響を与え、多くの国外の美術を招待し、理解してきた（抱いてきたという意味で）文化芸術の先進国でした。

こうした力量が蓄積がされ、トリエンナーレが毎回成功し発展することができたと思います。

「表現の不自由展・その後」をあいちトリエンナーレで電撃的に受け入れたのは、日本の底力を見せる素晴らしい決定でした。

テロと脅迫は、それ自体が不快で、日本社会から退けなければなりません。

「表現の不自由展・その後」を観る権利を日本の市民から奪わないでください。
「表現の不自由展・その後」で展示する権利をアーティストたちから奪わないでください。

展示場から「表現の不自由展・その後」を隔てる壁の中に埋めこまれたのは、おそらく「表現の不自由展・その後」ではなく、日本の良心です。

壁を取り払えば、日本の良心は再び生き返り、生命が吹き込まれるでしょう。

以上、このステートメントは、8月18日までに観客に見えるよう、「表現の不自由展・その後」を塞ぐ壁に貼り出すことを求めます。

あいちトリエンナーレ実行委員会

大村 秀章 会長 様 津田大介監督 様

2018年8月10日

〈平和の少女像〉作家 キム・ソギョン、キム・ウンソン